



Title	スタインベックの「菊」 或るちぐはぐな夫婦の物語
Author(s)	辻, 武男
Citation	長崎大学教育学部人文科学研究報告, 42, pp.43-50; 1991
Issue Date	1991-03-25
URL	http://hdl.handle.net/10069/33141
Right	

This document is downloaded at: 2019-03-26T04:35:51Z

スタインベックの「菊」
— 或るちぐはぐな夫婦の物語 —

辻 武 男

Steinbeck's "The Chrysanthumums":
Story of a Mismatched Couple

Takeo Tsuji

(一)

《私が思うに、スタインベックは『長い谷間』という題名のもとに収録された短篇の幾つか程に完璧で、熟達した作品は何も書かなかった。それらの短篇はチェーホフの最も感動的な物語に匹敵するか、もしくは凌駕している。⁽¹⁾》

これはアンドレ・ジイドの言葉だ。そしてジイドはそれらの優れたスタインベックの作品の中でも特に「菊」を激賞した。

「菊」は1937年に『ハーパーズ』誌に性的表現を抑制した形で発表され、そのあと『長い谷間』に収録された時、性的意味合いが再び強調された経緯をもつ。

「菊」批評は、おそらく、ジョウゼフ・W・ビーチがその著『アメリカの小説1920-1940』(1941)の中でスタインベックについて論評した時を嚆矢とする。ビーチは、性的意味合いの希薄な『ハーパーズ』版の「菊」を読んだらしいのだが、チェーホフの登場人物は、彼等の経済的地位がどうであれ、常に「魂」を持っているという事実を指摘し、「菊」のアレン夫婦の関係に論及する。

《この夫婦の関係については何も語られない。しかしすべては、それが信頼と相互的な尊敬の関係であることを示している。⁽²⁾》

『ハーパーズ』版の「菊」を読んだビーチは、アレン夫婦の間に深い性的・心理的・精神的葛藤があることまでは読み取れなかった。しかし一方でビーチは「[イライザ]が牧場主の妻としての生活程には安定していない或る生き方に対して満たされざる憧れを抱いている。⁽³⁾」と正しく指摘した。そしてイライザが「『人間の日々の糧』以上の何かあるものへの謎めいたロマンチックな憧れ⁽⁴⁾」を読者と共有していると言い、さらに「彼女は人生から本の頁へとかつて移された最高にえもいわれぬ人物の一人である。彼女が『魂』をも

っていることは疑いない。⁽⁵⁾」とビーチはイライザをほめちぎった。

ビーチ以後、注目すべきはピーター・リスカの「イライザの、女として要求される受動的役割に対する静かな反逆⁽⁶⁾」という言葉である。リスカはこのフェミニズム的な観点から「菊」を詳細にこそは分析しなかったものの、そのあとの「菊」批評は、リスカの影響下にあったと言ってよい。リスカ以後の「菊」批評は、スタンレー・レナーの次の要約を紹介するのが便であろう。

《「菊」は、男性が支配する世界に於ける女性の役割という一般的な考えによって個人的、社会的、性的充足を防げられた逞しく有能な女性についての物語である。彼女の夫は、上品だが鈍く、彼女を牧場の重要な仕事から締め出す。彼は、二人の結婚の現状に満足しており、家事を切盛りし花を栽培することに彼女が充足感をもっていないという事実を無視する。一人の巡回の鋳掛屋が、たまたま通りかかった時、イライザの潜在的な憧れは、男たちが享受している意義深い仕事、冒険、それに性の表現といった、より大きな人生へと目覚めさせられる。そして彼女が鋳掛屋に菊の新芽を托す時、彼女は、事実、広い世界へと手をのばす。が、鋳掛屋は彼女の花を公道に投げ捨て、かくしてより大きな人生を求める彼女の身振りを拒否する。そして彼女は男性支配と女性の不利な立場との哀れな犠牲のままである。⁽⁷⁾》

レナーは、「菊」の比喩的意匠と構造とを詳細に分析し、且つスタインベックの書簡を利用し上に引用した通説を大胆に覆す。『「菊」に於けるフェンスの中の本当の女性』という題名が示すとおり、レナーの論文はイライザの実像を解明しようとする意欲的な研究であり、イライザを『長い谷間』の中で「菊」と姉妹篇といえる「白うずら」の主人公メアリー・テラーと同列に置き、『「菊」の比喩的構造は、アレン夫婦の問題が『白うずら』に於ける葛藤の延長であることを示唆する。⁽⁸⁾』と独創的な見解を提出する。イライザは夫のヘンリーを彼女の庭に入れないが、旅回りの鋳掛屋は庭に入れるといった作品の構造から「菊」を分析するレナーのその手際は鮮やかだが、残念な事は、菊は種子ではなく苗を移植することによって栽培するのであり、彼女の花は決して受精しないがゆえに、イライザの庭は決して実を結ばないだろう、といった断言は、かかる比喩的意匠分析の陥りやすい瑣末主義を物語っているだろう。しかしレナーの論文は、充れ見落されていた事実、例えば、イライザは自分の意志で彼女の世界である庭を出ないのであり、夫のヘンリーがイライザに彼と一緒に果樹園で林檎を栽培する手助けを求めているという事実はこれまでの研究では無視されていたか誤解されたいたのである。農家の主婦であるイライザが、何故夫の仕事を手伝わないのか、これは作者が失念したのでなければ、イライザが気位が高く畑仕事を拒否しているという証左となろう。レナーの論文を詳細に引用し検討することはできないが、従来のフェミニズム的理解は大幅に見直されねばならないことを附言して、「菊」の検討にはிரいたい。

(二)

「菊」は有名な自然描写で始まる。

《灰色のフランネルのように濃い冬の霧がサリーナスの谷間を空と外界の残りすべてから孤立させていた。霧はまわりの山々に蓋のようにかぶさり、大きな谷間を蓋をした鍋のようにしていた。広い平地では連動プラオが大地に深く食い込み、鋤の刃が切り込んだところでは黝々とした土を金属のように光らせていた。サリーナス川の向こうの山すその高地にある牧場では黄色い切り株畑が青白く冷たい陽光を浴びているようにみえた。が、今12月の谷間には陽光はさしていなかった。川沿いの密集した柳の茂みは鋭くきわだった黄色い葉で燃えたっていた。

今は静かで待機の時期だった。空気は冷たくやわらかだった。微風が南西の方角から吹いていたので農夫達は間もなく慈雨が降るぞとかすかに心待ちにしているが、霧と雨は相伴わないのだ。⁽⁹⁾》

一見巧みな自然描写にすぎないようにみえるが、大きな谷間を蓋をした鍋と化す霧は、ウィリアム・ミラーが指摘するように、主人公の「イライザを取りまく欲求不満の雲⁽¹⁰⁾」を象徴しているし、「運動プラオが大地に深く食い込み鋤の刃が切り込んだところでは黝々とした土を金属のように光らせていた」という描写は、豊饒を約束する男女のまぐわいの比喩となっているのだ。さらに、切り株畑にさし込んでいるようにみえる青白く冷たい陽光は、イライザが抱く夢がはかない幻想にすぎないというアイロニーを外ならず、農夫達が待ちのぞむ雨が霧には伴わないという作者の説明もイライザの欲求不満を解消してくれる筈の夫のヘンリーの欠陥を物語っている。この「雨」は第一義的には、男性の精液を象徴している。黝々とした大地が、女盛りの逞しいイライザの肉体を象徴しているとすれば、イライザの側に肉体的欠陥を想定するのは難しいからだ。エリザベス・マクマハンが断言するように、夫のヘンリーが性的に不能である、という証拠は何処にもない。⁽¹¹⁾しかしアレン夫婦に子供が出来ないという事実は、夫の方に何らかの肉体的欠陥があるという印象を読者に与える。結論を先にいえば、アレン夫婦は肉体的にちぐはぐな夫婦なのである。しかも二人は精神的にもちぐはぐな夫婦なのである。充来の「菊」批評はイライザは夫のヘンリーを愛しているが、夫の方に問題があって、夫は彼女の相手になってくれず、イライザは性的挫折を蒙る、もしくは欲求不満を起こしているという見解だったが、ロイ・シモンズは、「イライザは彼女の夫を性的に満足させることができない、もしくは満足させることを好まないのではないかと疑う事例がある。」⁽¹²⁾と示唆して、「菊」批評に一石を投じたが、検討する価値があろう。

イライザは花壇で仕事をしている。中庭の向こうでは夫のヘンリーが背広を着た二人の男と何やら話し合っている。イライザは男達が気になるらしく時折、彼等の方に眼を向ける。イライザは男性の「煙草」と「機械」と「ビジネス」の世界に好奇心をもっているのだ。

イライザは35歳である。顔はほっそりし、しまりがあり、瞳は水のように澄んでいる。男のような出立ちの彼女の躰はずんぐりと重々しい。イライザは旧年の菊の茎を短く強力な鋏で切り倒しているのだ。彼女の顔は熱がはいり成熟しハンサムである。彼女の鋏の使い方ですえ熱がはいりすぎ、力がはいりすぎている。菊の茎は彼女の精力からすれば余りにも小さく手応えがないようにみえる。この短篇には性的イメージが氾濫しており、スタインベックがフロイド理論や方法的にはD. H. ロレンスの影響を受けていた事情を物語

る。「菊の茎」は男根の象徴に外ならないのだ。彼女の背後の小綺麗な白塗りの家の周りには窓の高さに赤いゼラニウムがすき間のないように植え込まれており、入念に掃除されたように見える家の窓はピカピカに磨かれ、玄関の靴ぬぐいも清潔にしてある。彼女の庭には害虫など皆無であり、イライザのリビドは家や庭の世話に昇華されているのが分る。イライザは気性の激しい女らしく、足音を立てずにやって来た夫が、彼女に向こうの果樹園で働いて、大輪の菊のように大きな林檎を育ててくれないか、と頼むと、眼付きを鋭くして「多分わたしはそれもできるでしょう。わたしには物を扱う才能があるのよ。」と応じる。前に触れたように、農家の主婦が夫と一緒に畑仕事をするのは極くあたりまえのことであり、イライザの方が畑仕事を拒否しているとしか考えられないのだ。

ヘンリーは30頭の去勢牛を言い値近くで売ったことをイライザに知らせに来たのだった。彼は妻に土曜の午後なので牛を売ったお祝いにサリーナスの町に行きレストランで食事をし、映画を観ようと妻に言う。さらにヘンリーはイライザをボクシングの試合に誘う。イライザはボクシングの試合を観に行くのは断るが外出を喜ぶ。このあと、ヘンリーが雇人のスコティーと一緒に去勢牛を探しに丘へ行く間、イライザは菊の苗をそろえる仕事をする。以上が「菊」の導入部に当る。

(三)

展開部は、イライザが庭仕事をしている時、「風変わりな動物たちに曳かれた風変わりな荷馬車」がやって来るところから始まる。その荷馬車は年老いた栗毛の馬と小さな灰色と白色のまじったロバに曳かれている。荷馬車には躰の大きな不精ひげをはやした男が乗っている。テント地の幌には「鍋、釜、包丁、鋏、芝刈機修理」と綴りを間違えた下手な字で書いてあり、この男の無教養を物語る。イライザは、この荷馬車が通り過ぎるのを見守っていたが、荷馬車は彼女の家の前の農道へと這入りこんで来る。後部の車輪の下に雑種犬がいるこの一行は、イライザの眼には「キャラバン」(隊商)にみえる。閉ざされた世界の住人イライザには、この一行がロマンチックにみえたのだ。男は髪とあごひげが白くなりかけており、着古した服はしわがより油で汚れている。ロレンスの描く自然人を連想させるこの男の眼には荷馬車ひきや水夫の眼に宿る考えこむような暗い表情があり、タコの出来た手はひびがはいり、そのひびは黒い線となっている。この男の話によれば、彼は北はシアトルから南はサンディエゴまで一年かけて往復するらしい。男の話聞いたイライザは、女心をのぞかせるように後毛を探しながら「それは素敵な生き方のようね」と言う。例によって男はイライザに注文を聞くが、しっかり者の彼女はそっけなく三度断る。男は今日は仕事がなく夕食にありつけない、と泣き言をいう。それでもイライザが注文を断ると、男はあたりを見まわし、イライザの菊の苗床を見つけると「その植物は何ですか、奥さん」と聞く。その瞬間、「いらいらした気持ちと抵抗しようとする意志はイライザの顔から消えてなくなった」とある。イライザは大輪の白と黄色の菊だと自慢して言うと、男は「茎の長い花のような？色のついた煙をパッと吹いたようにみえるやつで？」と尋ねる。この鋳掛屋の詩的言語とイライザの夫ヘンリーの散文的な言語との対照は今では手垢のついた解釈の要点となっている。男は菊“chrysanthemums”を“chrysantheums”と発音する程菊のことを知らないのだ。男は、道をちょっと行ったところに、ある婦人を知っており、婦人は菊の種を欲しがっていると嘘をつく。鋳掛屋は菊は種子ではなくさし芽から

育てるということも知らないのだ。男が、「あの方は苗が手にはいたらきっと喜ぶでしょう。素敵な花だとおっしゃいましたね」と言うと、イライザはくしゃくしゃした帽子をひきちぎるようにしてとり、黒く美しい髪をゆすり出す。これはイライザの潜在的な性意識を物語る。彼女は植木鉢に菊のさし芽をしてあげましようと言って、鋤掛屋を庭に誘う。男が棒杭の門を通過してやって来る間に、イライザは昂奮してゼラニウムに縁どられた路を通り家の裏へと走って行く。そして大きな赤い植木鉢をもって帰って来たイライザは、手を保護するための手袋のことなどすっかり忘れて、直接指で砂のはいた土をせせと掘り出す。彼女は鉢に菊の苗を植えこむと、鋤掛屋に菊の育て方を教えようとするが、彼女はここでハタと困惑する。「植木屋の手」のことは中々言葉で説明するのが難しいからだ。

《ええ、それはどんな感じかと言えないわ。要らない蕾を摘む時のことなの。すべてが指先に伝わるの。指が仕事をするのを見守るのよ。指はひとり—にそうするの。(中略) 指は植物と一体なの。分って?》⁽¹³⁾

指と植物との一体化を通して人間の本能と自然のリズムとの一体化が強調される。この一体化は性の交歓に近い。「彼女の胸は情熱的にふくらんだ。」鋤掛屋の眼はせばまり、彼は自意識的に眼をそらす。

《イライザの声はかすれた。彼女は男を遮って言った。「わたしはあなたみたいな生活はしたことないけど、あなたの言おうとすることは分るわ。夜が暗くて—そう、星々は鋭くとがって、あたりは静かなの。躰はどンドン上に昇っていくの! 先のとがった星がすべて躰の中へ這入ってくるの。そんな感じよ。あつくて、鋭く、そして—いい気持ち」》⁽¹⁴⁾

これが性の絶頂感でなくて何だろう。そこに跪き、彼女の手は、油で汚れた黒いズボンをはいた男の脚の方へと伸びる。「彼女のためらう指はその布地に触れそうになった。とたんにその手は地面に落ちた。彼女はじゃれつく犬のようにうずくまった。⁽¹⁵⁾」まっすぐ立ち上った「彼女の顔は恥らっていた。」とあり、イライザはこの時、性を意識した筈である。イライザは鉢を男に渡すと、気持ちの変化をみせ、家の裏へ行き、空罐の山からシチュー鍋を二つ見つけ、男に修理するように差し出す。彼は機械ハンマーを取り出し鍋を修理する。この機械ハンマーと鍋はそれぞれ男性生殖器と女性生殖器を象徴している。イライザは夫のヘンリーではなく、この鋤掛屋と心理象徴的に精神的・肉体的に通じ合ったのだ。

このあと鋤掛屋の荷馬車での生活へと話が移り、イライザは自由にみえるその生き方に憧れる。男は「御婦人にふさわしい生き方ではないですよ」と真実を漏らす、イライザにはそれが理解できない。「いつかライバルが現れて、あなたは驚くかもしれないわよ。わたしも鉄を研げるの。わたしだって鍋ぐらい凹みは直せるわ。女に何が出来るか、あなたに教えてあげれるでしょう。」とイライザは昂然と言う。鋤掛屋はハンマーと鉄床を片づけながら、再び「御婦人にとっては淋しい生活ですよ。おまけに夜中、荷馬車の下にけものが忍びこんだりしておっかない毎日ですよ。」と忠告する。イライザは別れを告げる

男にサリーナス道路に引き返すのに手間どるようだったら砂はしめらせておくのだよ、と大声で言う。もともと菊などに関心のなかった鑄掛屋にはこの砂が何のことか一瞬分らない。鑄掛屋の一行は再び「キャラバン」として言及され、イライザは「さようなら — さようなら」と言う。それから彼女は「あちらは明るい方角よ。あそこには輝きがあるわ。」と囁く。イライザのこの言葉には愛する恋人ないしは愛する子供（菊）の旅立への期待の念がこめられている。彼女の囁く声が彼女をハッとさせる。イライザのこの驚きは彼女の罪意識を物語る。「彼女はその考えから身を振りはらい、そして誰か聞いていなかったか、見るために周囲を見廻した。犬たちだけが聞いていた。」という描写にはユーモアがある。イライザは踵を返し急いで家の中へ駆けこむ。

(四)

勝手では昼間の料理用ストーブの熱で湯がわいている。イライザは浴室で汚れた服を急いで脱ぎ隅に投げる。それから彼女は臍を、脚、股、腰、胸、両腕と、皮膚がひっかいて赤くなるまで軽石でこする。イライザのこの行為は、マクマハンが鋭く指摘したように、「彼女が想像上で犯した不貞に対する償い⁽¹⁶⁾」を物語るであろう。またマリリン・H・ミッチェルが主張するように、イライザが軽石で赤くなるまでこすった臍の部分が、土で汚れた顔や手でなく、性感帯であることも理解しなければならない⁽¹⁷⁾。夫と没交渉であったイライザは自分が成熟した魅力的な女であることを確認した筈である。「彼女は臍を拭くと彼女の寝室の鏡の前に立ち、そして肉体を眺めた。彼女はおなかを凹ませ胸を張った。」とある。イライザが夫とは寝室を別にしていることに注意せねばならない。

しばらくして彼女はゆっくり服を着始める。彼女は一番新しい下着をつけ、一番素敵なストッキングをはき、彼女の美しさの象徴であるドレスを着る。そして彼女は入念に髪を整え、眉墨をひき、唇に紅をさす。こうしてまだ若い夫婦が町へ出掛け食事をするとなれば、レナーが示唆するように、その夜は夫婦の性の交歓となる筈なのに、そうはならない。レナーによれば「ヘンリーはその時代の結婚の手引きの最良の伝統に従って妻に求愛している⁽¹⁹⁾」のである。イライザには夫を心から愛することができない何かがあるとしか考えられない。彼女はヘンリーが門をパタンと締める音を聞くと、夫がやって来るのを身構えて待つ。おそらくイライザは先程犯した不貞と新たに認識した自分の女らしさに夫がどう反応するかを考え緊張しているのである。彼女はヘンリーが風呂の中で水音をたてているのを耳にしながら、彼の支度をする。それからベランダへ行き、すまして緊張したまま腰をおろす。そこからイライザが見る霜枯れの黄色い柳の茂みは陽光のうすい帯にみえる。「これは灰色の午後の中で唯一の色彩だった。」霜枯れの柳の茂みは掻き立てられたイライザの情熱とその行末を暗示していよう。ヘンリーがドア音を立ててやって来ると、イライザは臍を硬くし顔はひきしめる。「おや — おやイライザ。大変素敵にみえるよ。」とヘンリーがほめると、イライザは「素敵って？わたしが素敵にみえると思うの？素敵ってどういうことなの？」と聞く。ヘンリーはしどろもどろになってしゃべり続ける。「わかんないけど。きみが違って、強く、そして倅せにみえるということさ。」

イライザは夫から「美しい」とか「かわいい」とか「女らしい」とか、そうした女性原理を代表する形容を期待した筈である。ところがヘンリーの説明は男性原理を代表する「強い」という言葉だった。さらに『『強い』ってどんなことなの？』と聞くとイライザに、

ヘンリーは「きみは膝で仔牛を折るくらいに強くて、それを西瓜のように食べる程せにみえるってことさ」と答える。鋤掛屋の詩的言語と夫ヘンリーの散文的な言語との落差は明瞭である。イライザは夫を尊敬していないのだ。これがイライザが夫を愛せない最大の理由である。それに前に述べたように、夫の方に肉体的欠陥があり子供が出来ないとしたら、イライザは女としての倅せも、また母親としての生きがいも掴むことが不可能になる。このあとヘンリーは車を出しに行き、イライザは家の中へ這入る。

《〔イライザ〕は彼が門へと車を動かし、エンジンを空廻りさせるのを聞いた。それから彼女は帽子をかぶるのに長い時間をかけた。彼女は帽子のこちらを引張ったかとおもうと又、別の部分を押しつけた。ヘンリーがエンジンを切ると彼女はオーバーに手を通し外へ出た。⁽²⁰⁾》

一見何の変哲もない客観描写のように見えるが、俊敏な批評家レナーは、この奇妙で浪費的なエピソードに驚き、このことは、「イライザがヘンリーの彼女に対する性的な関心を支配している。⁽²¹⁾」つまり「彼女の性的魅力によって呼びさまされた彼の情熱がさめるまで ― つまり彼がエンジンを空廻りさせ、エンジンを切るまで彼女は彼を近づけない。⁽²²⁾」という事情を物語っていると解釈する。ロイ・シモンズは、イライザのこの振舞いは「おそらくイライザとヘンリーの結婚生活の普通のパターンと言えるものを示唆している⁽²³⁾」と述べる。卓見である。イライザとヘンリーの結婚生活はすべてこのようにちぐはぐなのだ。

車で町へ行く途中道路のずっと前方にイライザは黒い一点を見つける。それが何であるかは彼女にはすぐ解る。鋤掛屋はイライザが渡した植木鉢はとっておき、菊の苗を土ごと道路に捨てたのだった。心理象徴的に精神的・肉体的に通じ合った筈の鋤掛屋の何という裏切りであろうか！

車が道路を一曲りすると前方にあの「キャラバン」をイライザは見ると。その荷馬車を通り過ぎる時、前に「風変わりな動物たちに曳かれた風変わりな荷馬車」とイライザの眼に映った馬とロバは、ここで「ちぐはぐな動物たち」(“the mismatched team”)と駄目を押される。作者スタインベックは「ちぐはぐな動物たち」に象徴的意味をこめてイライザとヘンリーのちぐはぐな結婚生活を暗示したのである。心憎いほど見事な技巧である。

このあとのイライザとヘンリーの会話もちぐはぐである。イライザはエンジンの音に消されないように声高に言う、「今夜はいいわね。美味しい夕食がたべられて。」それに対して「おや、きみはまた変わったね」とヘンリーはぼやく。二人の間には意志疎通がないのだ。「夕食のときワインが飲めて？」という時のイライザの気持ちは当然のことながら夫のヘンリーには分らない。菊の苗を托して鋤掛屋に裏切られ、失意の底に沈んでいるイライザの心は鈍いヘンリーには理解しようがないのだ。イライザは、前は関心を見せなかった、男たちが血まみれになって闘うボクシングの試合のことを言いますが、これもまたヘンリーには驚きでしかない。

《彼女は座席にぐんにやりもたれた。「いえ、わたしは行きたくないわ。本当にそうよ。」彼女は彼から顔をそむけた。「ワインが飲めたら、それで十分よ。それで沢山だわ。」彼

女はオーバーの襟を立てて、自分が — 老女のように — 弱々しく泣いているのを彼に見られないようにした。⁽²⁴⁾

「菊」の締括りの場面である。「老女のように — 弱々しく泣いている」イライザは自己の人生に絶望したのである。ひとりの女としての倅せも掴めず、母親となることもできず、閉ざされた世界に住み自己実現もできないで悲しみの底に沈むイライザは、ビーチがチェーホフを援用して言ったように、確かに「魂」をもっている。「菊」がチェーホフの作品に優に匹敵する所以である。

〔註〕

- (1) F. W. Watt, *Steinbeck* (New York : Chip's Bookshop, Inc, 1962 ; repr. 1978), p. 42.
- (2) Joseph Warren Beach, *American Fiction 1920 — 1940* (New York : Russell & Russell, 1941), p. 311.
- (3) *Ibid.*, p. 312.
- (4), (5) *Ibid.*, p. 314.
- (6) Peter Lisca, *The Wide World of John Steinbeck* (New York : Gordian Press, 1981), p. 95.
- (7) Stanley Renner, "The Real Woman inside the Fence in 'The Chrysanthemums,'" *Modern Fiction Studies* vol.31, no.2 (Summer 1985), p. 306.
- (8) *Ibid.*, p. 308.
- (9) John Steinbeck, *The Long Valley* (London: Heinemann, 1974), p. 1.
- (10) William V. Miller, "Sexual and Spiritual Ambiguity in 'The Chrysanthemums,'" ed. T. Hayashi, *A Study Guide to Steinbeck's The Long Valley* (Ann Arbor, Mi: The Pierian Press, 1976), p. 2.
- (11) Elizabeth E. McMahan, "'The Chrysanthemums': A study of a Woman's Sexuality," *Modern Fiction Studies*, vol. xlv, no.4 (Winter 1968 — 1969), p. 455.
- (12) Roy S. Simmonds, "The Original Manuscripts of Steinbeck's 'The Chrysanthemums,'" *Steinbeck Quarterly*—vol. VI, nos. 3 and 4/Summer-Fall(1974), p. 107.
- (13), (14), (15) *The Long Valley*, p. 8.
- (16) McMahan, p. 458.
- (17) See Marilyn H. Mitchell, "Steinbeck's Strong Women: Feminine Identity in the Short Stories," in R. S. Hughes, *John Steinbeck* (Boston: Twayne, 1989), p. 164.
- (18), (19) Renner, p. 311.
- (20) *The Long Valley*, p. 12.
- (21), (22) Renner, p. 313.
- (23) Simmonds, p. 108.
- (24) *The Long Valley*, p. 13.